

松田道雄の育児思想について（ ）

小児科学から育児学へ

大 森 隆 子

序

小児科医の松田道雄が1998年6月1日に89歳で亡くなった。氏の最大の功績は、ベストセラー『育児の百科』(岩波書店、1967年初版)の著作であろう。私自身を始め、どれほど多くの母親がこの『育児の百科』を頼りにして初めての子育てに臨んだことだろうか。戦後生まれの親たちにとって、この育児書は子育てのバイブルともいえる。

同年の6月3日から5日にかけて、各新聞紙上では追悼の文で特集が組まれ、あらためて氏の功労について省みる機会となった。その中から2～3紹介すれば、朝日新聞では、氏の肩書きは小児科医師かつ評論家とあり、その業績について「小児科医院を開業する一方、医療・育児・教育から社会・政治問題まで戦後民主主義思想の旗手の一人として積極的な評論活動を展開した¹⁾」と記された。また、特に小児科医師としては「子ども、女性、患者に優しい目」をもっていたと特徴づけ、

日本の小児科医師は概して子どもの立場に立って「風邪をひかせたな」などとお母さんを責めるが、松田さんは一貫してお母

さんにエールを送っていたのが魅力的だった²⁾

との発言を載せている。まだ世間的にも認知されていない当時から、働く母親には、子どもは自分で育つ力があると励ましていたという。

中日新聞では多田道太郎氏の追悼文³⁾を掲載し、ご自身の辛い体験(かかりつけの医師として世話になった娘が、20歳代で夭折した)を越えて「患者の個性に温かい目」という副題のもとに、患者の親の目で診療風景を回顧し描写されている。何より診察室は子どもの天国、親には指導室だったという。その部屋で、子どもの自由がなにより大事と無言で教えられたと述べている。

奇しくも松田氏と同時期にもう一つの育児のバイブルとして日本の母親たちにも多大な影響を与えた『スポック博士の育児書』の著者であるベンジャミン・スポック博士が、太平洋を隔てたアメリカで1998年3月15日、94歳で亡くなっている。

今日、連日のように報道される育児をめぐるトラブル、虐待、少子化の傾向等に見えてくる日本の母親たちの子育て不安の解消のためにも、何より日本の子どもたちの

1) 「松田道雄氏が死去」朝日新聞、1998年6月3日。

2) 「子ども、女性、患者に優しい目」朝日新聞、1998年6月4日。

3) 多田道太郎「松田道雄を悼む」中日新聞、1998年6月5日。

ために、松田道雄の育児観を、氏が育児書を通して訴えたことの真意について精察しておく必要がある。

松田は膨大な著作を残している。そのジャンルも医学から社会思想史に至る異質性を孕む広域さに加えて、診察・治療という極めて現実的地平と日本およびロシアの思想史という形而上的、観念的な地平の両面を併せもつ。こうした特異性もあって、これまで「松田道雄論」なるものはほとんど論じられていない。わずかに、教育学者である勝田守一がその著書『教育と教育学』⁴⁾のなかで一章を設けて挑んでいる。その視点や方法について、氏は次のように逡巡しつつ提示をされた。少々長いが引用してみる。

私がここで試みたいのは、決して全体像をめざす「松田道雄論」ではない。その資格はいまの私にはないし、病後のエネルギー不足はそれに堪えない。ただ去年の秋世に出た『育児の百科』という大作に接したのを機縁に、先の友人の疑問に答えるためにも、「育児の松田」と「知識人論の松田」との問題意識の連りを掘り当ててみることで、松田道雄の育児論における思想性というようなものを考えてみたい。それについても他の育児専門書、すぐれたものにはアメリカのスボックのものが有名だが、と直接比較するという方法もないではないし、それはそれで有効であるはずだから、一部の読者にとっては魅力のあるやり方だろう。私にはその能力はないが、できる範囲でも、多少の試みをしてみたい誘惑には簡単に打ち克てそうにもない。

私はしかし、自分のできる方法でやってみるほかはない。それは医師松田道雄の「歴史と人間」を觀る思想と「子どもと教育」を問う態度との結節点を探ってみることである。そして、その結節点で近代医学

というものの社会的な役割の一つの果し方を見きわめることができればしあわせだと自分では思っている。⁵⁾

結果として勝田は、松田道雄論の切り口として「歴史」「医学」「教育」の3点に設定を行ない、論を展開された。

結論から言って筆者も、松田道雄論を論じる技量を持ち合わせていない。そこで本テーマである松田道雄の育児思想を見通すために、まず氏の代表作『育児の百科』に焦点を当てて考察していきたい。この書には、松田の「医学」的知識、自由と人権を何より尊ぶ「思想」、それに長い年月をかけて蓄積・継承してきた「民俗」の知恵の三つがキーワードとして存在していると思う。本稿では、この書に至る氏の育児関係の著作をたどることで、氏の育児論の原点および形成過程を検証してみたいと考える。

松田道雄年譜

『私の読んだ本』⁶⁾他より、氏の育児論形成に関与したと考えられる事項を中心に記してみる。

- 1908年 茨城県にて生まれる。家業は代々の医家。父、松田道作は京都帝国大学医学部小児科教室出身。京都、聖護院の山王町の借家に移る。父、京都帝国大学医学部に勤務。
- 1910年 丸田町の仲小路に移る。
- 1914年 烏丸蛸薬寺に移る。父、大学をやめ開業。

4) 「歴史と医学と教育と 松田道雄氏の育児論の思想について」(勝田守一著『教育と教育学』岩波書店,1970年,所収)

5) 同上,p265.

6) 松田道雄『私の読んだ本』岩波書店,1971年。

- 1915年 明倫小学校に入学。辻遊び、活動写真(洋画)に夢中になる。
- 1919年 大正自由教育の影響を受け始める(校長・塩見静一)。画家・角田素江による自由画の指導により新聞自由画コンクール三等入選。芦田松太郎により自由教育の実践(作文他)を受ける。学校が楽しくなり、勉強に身を入れる。初めて独立した勉強部屋をもつ。
- 1920年 受験準備。
- 1921年 京都一中に入学。校長・森外三郎(自由主義教育者)。
- 1922年 優等生からの脱却をはかる。探偵小説に凝る。
- 1923年 二学期より庭球部に入部。親友金剛貞雄(小学校からの友人で能楽師の家)の死により「死」への問いをもつ。
- 1924年 親友鈴木君に誘われマリア教会のバイブルクラスにゆき、聖書を読み始める。受験勉強への集中。
- 1925年 京都三高理科乙に入学。ドイツ語の熟達という学校での義務と、文学の夢を結びつける。読書への集中(読書家の青年・山下幸一の指導)期を送りつつ将来の方向を定める。医者をしなから、文学の本を読むという生活設計をする。
- 1927年 時代の影響の中、社会科学への関心をもつ。
- 1928年 京都帝国大学医学部入学。三高読書会、医学部読書会に参加。
- 1929年 湿性肋膜炎で倒れる。理論と実践の狭間で自責の日々が続く。
- 1932年 医学部卒業。小児科の医局に無給助手として入る。臨床医であることを肝に銘じ臨床例をこなすことと、小児科医師としての本源的蓄積期として文献を読破する。
- 1935年 医師としての使命感から、「結核」をテーマに取り上げる。平井毓太郎先生(京都帝国大学小児科教室の開祖で、松田道雄氏の父も教え子)宅を初めて訪問し、京都の大学で結核を研究していないことを嘆かれる。結婚する(学生時代からの友人)。共働きを続ける。
- 1937年 西ノ京健康相談所に赴任する。底辺の生活を知る。結核の臨床と研究に打ち込む。
- 1939年 『結核』を出版する。
- 1941年 京都府庁の衛生科、結核予防係に勤める。週に二日は、相談所で気胸を続ける。役人の虚飾を知る。「小児慢性肺結核に関する研究」をまとめる。
- 1942年 厚生省の命により、和歌山県の内政部に転勤する。軍医予備員となり、伏見の兵営に入隊する(4週間)。召集される。原籍地の陸軍病院づきとなる。結核患者の担当となる。重傷患者へのサービスを考える。おやつ、麻薬など。
- 1945年 終戦
厚生省に辞表を提出。大阪近辺の私立病院の小児科に勤務。

- 1947年 民主主義科学者協会の阪神支部例会で、「日本の医学の低さについて」初講演、のち『人間と医学』として出版。
病院勤務をやめ、京都に診療所を開設。自由診療、小児科および結核の療養相談。看護婦を使わずすべて自分が行なう。母親の正確な情報と、親子の人間関係の掌握に役立つ。
並行して執筆活動を行なう。
- 1949年 『赤ん坊の科学』を出版。平井毓太郎先生から学んだことを、自身の小児科医の経験にひきつけてかく。毎日出版文化賞を受賞。
診療方針(子どもを恐がらせる注射をしないなど)を理解する患者がふえる。
日本患者同盟の機関誌「健康会議」に連載執筆。医学のことを病人の立場から考える姿勢に徹する。翌年、岩波親書『結核をなくすために』として出版。平和問題懇談会京都支部に参加。
- 1952年 新日本医師協会京都支部で「ソビエト医学協会」を設立、参加。
- 1957年 日本小児科学会の代表として、ソ連の小児科学会総会に招待される。レニングラードに半月滞在する。「小児結核とおとなの結核との関連について」報告。帰国後、4人に1人ずつ保母のついている教育研究所の付属保育園や長期患者のため
の院内学校をもつ小児病院の話をもつ、保育関係者や医師に行なう。一方で、ソ連の下層の人たちの無気力な姿が濼のように沈殿していく。
『育児日記』を出版。
- 1959年 翌年にかけて、「私は赤ちゃん」「私は二歳」を連載(朝日新聞)。赤ん坊からみている子と、幼児期になるまで他の医者にかかっていた子どもとが、診察室に入ってきて、全く違う反応を(医師に示す信頼、不信の表情)示すことが動機。核家族のなかでの子育ての方法を考える。
- 1960年 京都大学人文研究所を中心とした、革命の比較研究の「共同研究」(桑原武夫)に参加。
関西保育問題研究会会長。健康な幼児の集団の中での子どもの成長に関心をもつ。小児科医としては育児相談が主な仕事となる。幼児の集団保育は学問として未開拓であったため、本を作ることを提唱する。(『新しい保育百科』として結実)
『新版赤ん坊の科学』を出版。10年の経験に立って反省し直す。『はじめての子供』を出版。
- 1961年 総評「新週間」に育児相談を執筆。
- 1963年 松田道雄編『新しい保育百科』を出版。全国の幼稚園と保育園で働いている人のための本。家庭で育児をしている母親のための本(子どもを集団のなかで比較してみることのできる保

育者の目が、子どもの成長を、
まともにみているところを
読んで、自分の子どもしかみない
狭さに気付いてほしい)。保育
者を志す学生のための本(生き
生きとした現場の空気を伝え
る)。

手法としては、テープレコー
ダーに保育者の話を記録して
原稿の資料とする。

1964年 毎日新聞連載記事「日本式育児
法」を執筆。実際にお年寄から
取材する。江戸時代の育児関係
の資料を読む。

『こんなときお母さんはどうし
たらよいか』を出版。

1966年 朝日新聞連載記事「おやじ対こ
ども」を執筆。日本人の家庭の
モラルについて、江戸時代の市
民の生活を復元する。

1967年 小児科医開業を廃する。以後執
筆業に専念する。

『育児の百科』を出版する。母親
たちのために、丁寧な育児書
を書く。子どもの成長に応じて月
を追って、毎月一章ずつ読む構
成とする。

1980年 新版『育児の百科』出版。

1987年 最新版『育児の百科』出版。

1998年 亡くなる。

1999年 定本『育児の百科』出版。

『赤ん坊の科学』について

1 著作の動機

この本⁷⁾は氏の最初の育児書といえるも
のである。その経緯について、初版のあとが
きには、「小学校からの級友で阪大工学部に
いる井元稔君に、十年ほど前に、手紙の形式
で育児の助言をかいてみようか、といった
ことを井元君がおぼえていて」⁸⁾創元社の加
藤氏に話したことから進展したことだと記
している。加藤氏は病気の予防について書
くよう奨めたという。松田は当時出版され
ていた育児書にあたり、「私が書くとする
ば、そういうものを書いてない部分でなお
若い両親の必要とする知識」⁹⁾にねらいを定
めた。それは、第二次世界大戦の間にアメリ
カが切り拓いていった新しい小児科学の分
野であった。乳児の栄養や伝染病の予防に
ついてなど最新のデータを集めその出
所まで示したのは、地方の小児科医のため
でもあった。「あかんぼを病気にかけまいと
する若い父や母に、この本がいくらかでも
役にたってくれればいいと願っている」¹⁰⁾と
の発言からも、この頃は育児書といえば病
気対策が中心であったことも読み取れる。

2 形式と内容構成の特徴

主人公は小児科医で、知人からの求めに
応じて育児のアドバイスをするという形式
をとっている。相手の親子は遠方在住者の
ため、医学的情報や助言(出産前から出産
後の乳児期)は手紙のやりとりを中心に行
なう。本著は医師側から送った約一年間に

7) 松田道雄『赤ん坊の科学』創元社、1949年。

8) 同上、p149。

9) 同上、p150。

10) 同上、p151。

わたる手紙文(第1信から第10信)を連ねる方法で構成している。

内容は第1信が出産(13項目)まで、第2信が早産児(10項目)、第3信が初生児の生理学(13項目)、第4信が人工栄養(14項目)、第5信がビタミン(12項目)、第6信が離乳(6項目)、第7信が結核の予防(6項目)、第8信が乳児の急死の原因(6項目)、第9信が肺炎(11項目)、第10信が伝染病の予防(23項目)となっていて、乳児学の通信教育といった体裁をなす。目次においては内容を項目化して示してあるが、本文は手紙文として通して書いてある。全体が医学的知識の記述で占められ、しつけや教育の領域は取りあげられていない。なかでも結核に関する事項は充実している。第7信を、「結核の予防」として6項目すべてを当てている他、第1信「出産まで」では13項目中3を、第3信「初生児の生理学」では13項目中1を結核関係の内容に当てている。この点は、氏の専門性と臨床経験を生かしたものと考えられる。加えてデータの紹介に力点がおかれ、「食品100グラムの中のカルシウムと燐」「生後1週間の乳の1日の全量」「薬の体重別服用量」「結核の月・年齢別陽性率」など詳しい数値が随所に挿入されている。またその出所について原語で付記されているのも育児書としては珍しい。

3 松田氏の育児観

ここでは、育児というものが病気から命を守ることや、科学的な根拠に基づいて授乳や離乳などの育児行為を行なうことといった医学や科学的知識の伝達に絞られている。これは当時の子どもたちが晒されて

いた社会現実を如実に表わしてのことと思われる。しかし後の松田の育児思想の展開を検討する見地から、医師と母親の関係、教育観、育児と風習、育児と女性の生き方、育児における父母の役目といった点からもみておきたい。

まず育児を小児科学の領域に収斂するという考え方は、当然のことながら医者と親を専門家と素人に区分し、医者を親の指導・啓蒙者として上位におく。したがってこの時期には、母親のパートナーとしての医師の位置付けはみられない。

次に氏の教育観が窺える文言を引用してみると、

育児院などで、たくさんの赤ちゃんをあずかっているところで、手がまわりきれず、赤ちゃんをいつまでも、かごのなかに座らせておくところでは一年半たっても歩けない子がよくいます。教育とか練習というものは、生まれついたものに何かを加えるというよりも、既にあるものを掘り出してやることといったほうがいいでしょう。育児院などでこの練習を規則正しくやるために、乳児体操というものが考えだされているわけです。ふつうの家庭では不要です。¹¹⁾

とある。このように注入教育を明快に否定し、子どもが本来もっているものを引き出す教育を大切にしていることがわかる。

育児と風習については後の松田の独自のテーマになる領域だが、ここではほとんど触れられていない。わずかに、事故の場合の対処例としてドイツ夫人の例が紹介されている。

赤ちゃんがはってあるくようになったら、ボタン、ナフタリン球、ご石、貨幣、ラムネのたまなどを手のとどくところにおかないことです。もしまちがって、そういうも

11) 同上, p45.

のをのんだところをみつけたら、いきなり両足をもってさかさずりにしてふることです。大学に交換教授できていたドイツ人のラウエルさんのところへ遊びにいらしているときでした。次の部屋にいた赤ちゃんが五十銭銅貨をひろってのみました。のどへつままったとき、奥さんがとんでいって、これを実演しました。なきさけぶ赤ちゃんの口から銀貨が床にころがりおちました。ドイツの或る地方では、これは風習になっている、どの母おやでもやるんだそうです。¹²⁾

わずかに引かれている例が外国人の事例であることは、この時の氏の地平をよく表わしているとも考えられる。

育児と女性の生き方の関係については、外国の女性と比較する方法で少し触れてある。それは第6信の離乳の記述のなかにある次の箇所である。

西洋では一ぱんに離乳が日本よりはやくいようです。西洋の女は、日本の女よりも、美容術によけいに関心をもっているからだといわれてきましたが、これは、西洋の主婦の生活が、より近代化され、社会生活のなかにより多く参加していることにも原因していると思います。¹³⁾

ドイツ人とアメリカ人の離乳時期を、それぞれの国の教科書から比較して日本人との違いをみつけ、その理由を婦人の生き方の違いに認めているのである。

育児における父母の役目については、母親を庇う発言が多くみられる。一例をあげれば、事故に対して気をつけるのは当然だが、それを母親の責任にだけしてはいけない、事故の起きないような住環境の整備に父母ともに力を合わせなければいけないの

だと説いている。

『育児日記』について

1 著作の動機

松田は1956年に、半年ほど大阪読売新聞の育児の紙上相談を担当した。この間、お母さんたちから数百にのぼる質問が寄せられた。いずれも書面による投書で、その中から抜粋して週に3回ほど回答を載せていった。しかしながらこの方法では全部の質問には答えられないこと、急を要する時の対応に難儀を極めたことなどから、返事の方法について思案をした。そうした時、投書の手紙の山から「あるきまった月齢や年齢の子供について、おなじ質問が多いことに気がつきました。これはひとつ、年の順にならべておいて返事を書いておけば、子供を育てているお母さんには便利だろうし、自分もおなじ返事をくりかえさずすむのではないか」¹⁴⁾とあったことが切っ掛けになってこの本ができたと経緯を述べている。ここでは小児科医の立場から必要な事項を啓蒙的に解説していくのではなく、育児にあたっている母親の個々の悩みや質問にまず耳を傾け、専門家としてあるいはパートナーとして適切な助言を行っていくという姿勢が確立されている。本のタイトル『育児日記』は、子どもの月齢の進展に相応して問と答が並べられているところから名づけたものであろう。

同様の手法をとったものとして、雑誌『暮らしの手帖』¹⁵⁾に「手紙」と「私の考え」

12) 同上, p112.

13) 同上, p90.

14) 松田道雄『育児日記』文芸春秋社, 1957年, p1.

15) 松田道雄「お母さんの手紙」(『暮らしの手帖』72号, 暮らしの手帖社, 1963年, 所収)

を対に掲載した「お母さんの手紙」(後に『こんなときお母さんはどうしたらよいか』¹⁶⁾として出版)がある。

2 構成と内容

母親の手紙をそのまま使って「問」とし、それに一つ一つ「答」をかく方式とする。対象児は、新生児から小学校6年生までで、年齢区分としては新生児(誕生より1ヵ月まで)、1ヵ月から6ヵ月まで、7ヵ月から12ヵ月まで、満1歳から満2歳まで、満3歳から満6歳まで、小学1年生から3年生まで、小学4年生から6年生までの7段階に分けられている。実際の問には月齢が付してあるので、さらなる明細化も可能である。

内容は、医学的知識の回答を主とする分野としつけおよび教育の相談分野とからなる。その比率は医学的知識にかかわるものが、幼児においては164件中147(90%)で、学童においては54件中44(81%)である。年齢別にみると0歳児は81件全部、1歳児は21件中15、2歳児は15件中9、3歳児は17件中15、4歳児は8件全部、5歳児は11件中8、6歳児は11件全部という分布である。残りは、しつけや教育相談となっている。相談例は新聞社に寄せられた手紙から120件、あとは自分のカルテや同じ小児科医であった父親の患者名簿(初診の病名を記入)をもとに抜けている例を追加した。その分は松田が問を作文したとしている。

3 松田の育児思想

この著書を通して看取できる育児思想の断片をあげてみる。第一に赤ちゃんの健康

度のものさしとして、日を決めて体重を測ることを奨めている。客観的な基準を判断材料にする科学的な姿勢である。第二に子ども観である。身体の側面(乳を吐く、便秘、湿疹体質など)、また精神の面(内気、我が強い、素直など)で自分の子どもの個性を識ることが大事であると強調する。個性はよし悪しの基準で誉めたり愚痴ったり矯正するのではなく、あるがままを認めた上で得意なものを伸ばして自信をもたせることが大切と助言する。第三に働く母親への視線である。「最近赤ちゃんができて職場をやめない人がふえてきました。働く婦人の育児という新しい問題がおこってきたわけです。働く婦人のための託児所がつかれないかぎりこの問題はうまく解決できないと思います。しかし、現状ではどうすればいいかということも考えてみました」¹⁷⁾と述べているように、女性が選択する生き方への肯定がまずあり、次に問題解決のための前向きな思考がある。「世間では赤ちゃんの時代の栄養のことが一ばんむつかしいように言いますが、実際の困難はむしろ幼児期にあると思います。日中に八時間母親とはなれて生活することが幼児の精神的成長に不適當であるということになると、共稼ぎという家庭の形に大きな反省がいくことになるでしょう。こういう点は、これから働きながら子供を育てるお母さんたちと一緒に研究していきたいと思います」¹⁸⁾という姿勢を貫き、以後研究を続けていく。第四にしつけ観についてである。「しつけ」というのは時代とともに変わるもので、また家庭によっても異なるものと考え。そ

16) 松田道雄『こんなときお母さんはどうしたらよいか』暮らしの手帖社, 1964年。

17) 前掲『育児日記』p3。

18) 同上。

の中でうまくいっている家庭の共通項として、夫婦の意志(老人たちの意志でなく)が一致していて、主体的に家庭を運営していることがあげられるという。平凡な市民ではあるが、自分たちの“流儀”をもっていて、その自信や迫力が子どもをしつけていると考える。第五に教育観についてである。氏は相談項目に「うちの子は天才か」とか「音楽家にしようか」といったものを取り上げている。その助言内容に氏の考えがよく表れている。「天才に仕立てようと思うな」というのが単刀直入な助言である。天才は必ずしも幸福な人生を送るのではなく、現在の社会はむしろ平凡な市民が幸福に生活できる方向に進んでいるという。

『はじめての子供』について

1 著作の動機

松田はこの頃、新たな願いを抱くようになっていた。それは、「健康な子供のこよみのようなものをつくりたい」¹⁹⁾ということである。自らの臨床経験を重ねることで、また世の育児相談に広く応じる過程で、当時の母親たちの要望に真に答えるには、病児や病状を対象とする小児科医の視点からだけでは不十分で、健康な子供の育ちに関しての知識や子育て法の見解を確立することが自己の課題として定まりつつあったのであろう。

こうした時、ある患者の育児日記を知り、そこに自身の願望や信条が具現されていることを確認した。それは、その記述から一人の健康な子供の成長の足跡が現実感をもってよみとれること、と同時に初めての

子をもつ親の不安や喜びが縋い交ぜになった心の動きや育児の苦労を経て親としての成長がみてとれることである。何よりの決め手は、書き手が父と母の双方であったことにある。こうした幸運な出会いがこの本を生み出した。

2 形式と内容

実物の育児日記(誕生から満3歳まで)の記述をベースに、主治医の松田がアドバイスや評論を加える形から成っている。出生から1ヵ月までは、1週間ごとに育児記録を紹介し松田のコメントを付している。その後満2歳までは、1週間ごとの育児記録を1

表 『はじめての子供』における
年令別の内容区分

年 齢	内 容	数	具体的項目例		
0歳児	しつけ	26	母乳不足・湿疹など		
			離乳食	12	
			睡眠	2	
			排泄	1	
			人間関係	2	
			心理	7	
	日課	1			
教育	1	人権問題	1		
1歳児	教育	1	室内環境		
	しつけ	9	医学的知識	8	下痢, BCGなど
			食事	2	
				睡眠	3
				排泄	2
				入浴	1
				人間関係	1
教育	8	室内環境	1		
		絵描き本言葉など	7		
2歳児	医学的知識	6	ツベルクリン・ストロブスなど		
	しつけ	8	食事	2	
			睡眠	1	
			排泄	1	
			人間関係	3	
			日課	1	
	教育	5	心理	2	
		教育	3		

19) 松田道雄『はじめての子供』中央公論社, 1960年, p195.

月ずつまとめて紹介した上で、さらに満3歳までは、1月を単位として記録を紹介し、それぞれ松田のコメントを付している。いずれにしても、記述は日付入りで、具体的かつ事実に則って正確に記載されたものであることは明白である。

内容は、医学的知識に関するものとそれ以外の子育て一般に大別される。その分量は、全体では、前者が101項目中42で、後者が59であった。医学的知識に関するものの比率は41パーセントを占めた。さらに年齢ごとにみても、満1歳までは50パーセントで、2歳まで、3歳までは、いずれも32パーセントであった。内容の区分を表に示す。

3 この本にみられる育児姿勢と育児の条件

育児姿勢から言えばその第一は、父と母の精神的一致である。この夫婦の場合はキリスト教の信仰によるところが大きい。これは必然ではない。互いの信頼と対等が保たれていることが肝要である。第二に、育児に際しては両親が優位性をもつこと(祖父母等に対して)である。第三に、祝い事や行事を生活の核とし、屋外教育を子育ての核としつつ家庭生活をベースに育児を行なっている。第四に、夫婦して最善の努力を育児に注いでいる。第五に、夫婦それぞれに自己課題(夫は教職、妻は手仕事)をもつということである。以上の育児姿勢を全体として、松田は「生活の規律をもつ」育児例としている。

育児を支える条件としては第一に、育児に集中できるだけの経済的ゆとりがある。

第二に、夫の職業上育児に参加し得る時間のゆとりがある。第三に、夫婦をサポートする人的スタッフや交友関係に恵まれている。第四に、信頼できるホームドクター(松田道雄)をもっているなど好条件に恵まれていることは松田も認めている。

ところで、松田が「生活の規律」という言葉を用いて育児姿勢の要素として指摘しているこの事項について考察しておきたい。この言葉は、本文中に、

育児というものを、乳のうすめ方とか離乳の仕方だとかいう、赤ん坊飼育法にしまったのは、日本の育児法の墮落である。物質的方面ばかりをみて、精神の側面を見ないやり方を唯物主義とするなら、いまの日本の育児法は唯物主義に撤している。赤ん坊が成長するのに必要な精神的な環境については、全く省略してしまっているからである。キリスト教国では、キリストの教えと儀式とが、親たちの生活に一つの規律をきめている。宗教を否定した社会主義国でも、親たちは、キリスト教以上に厳格な生活の規律をきめられている。²⁰⁾

という説明を添えているように、子どもの育つ精神的な環境面をさす。戦前の日本は、国家が定めた「教育勅語」がその中核をなしていた。それが抹消された戦後は、新しい規律の中核を各自が作らねばならなくなったという。物質面だけでは子どもは育たないということを、当時既に警告していることに注目しておきたい。

この夫婦の精神的な環境を形成する支柱はキリスト教であるが、生活の中で具体的な形となって現われる規律は、その信仰に由来するもの、父親の職場やわが国の地域的または伝統的なもの、それに夫婦間で取り入れているものから成る種々の行事と、

20) 同上, pp35 ~ 36.

夫婦が子どもの教育に必要と考えるさまざま屋外教育の二種から構成されている。前者には、クリスマス、祖母を見送る納棺式・告別式・追悼式・納骨式・一年忌、鎮魂ミサ、復活祭・教会バザー・復活保育園、職場の運動会・展覧会、地蔵盆、鞍馬の火祭り、大文字焼き、お食初め、七五三、雛祭り、子供の日、母の日、父の日、七夕祭り、お月見、お彼岸の墓参り、300日記念の写真撮影、誕生日(父・母・子ども)の祝い、命名記念日、見合い記念日、婚約記念日、結婚記念日、知人の結婚式などがあり、後者には、散歩、音楽会、博物館、バラの花展、菊人形展、御所の花見、百貨店での買物・食堂・屋上の遊園地、親戚や友人宅への訪問などがある。いずれも子どもにとっての楽しい思い出や成長の場となるよう考慮されている。

4 松田の育児思想

この著作を通して汲み取れる松田の育児思想もしくは人間観を抽出してみたい。第一は、「出生時に思う男か女か」という想いについてである。この両親の「男か女か」ということは問題にしない。彼らにとっては、親になったという喜びが他の問題を押しつけてしまう²¹⁾という心情に着目している。世の常が「はじめての子は男であってほしいと願うのが、凡夫である。凡婦のほうは一そう、そうかもしれない²²⁾」との願望をもつのは、「女のほうが日本では割がわるいということ認めながら、その複雑な問題を、生まれた子が男であってくれるという

ことですりぬけようという怠惰である」²³⁾と直言している。すなわち、子どもの性差にかかわる人権問題の根源は親自身の意識改革に問われていることを指摘しているのである。

第二は幼児語をめぐる見解にみられるような、子どもの個性や主体性の尊重である。

社会主義国の教育の本には、子供言葉を大人がまねてはいけないということがかいてある。だがそれは、子供を集団的に教育する託児所での教育法である。託児所の世界では意志を通じあう手段はなるべく大ぜいの子供に通用するものでなければならぬ。だから個々の子供の発明した言葉を採用しているわけにはいかない。

だが日本の家庭で、赤ん坊が自分の力で、伝達の道具をつくりあげてきたら、その道具をとりあげてやるべきだと思う。(中略)問題は意志の疎通であって、正しい発音を教えるのはもっとあとの問題だ。自分の赤ん坊が発明した言葉を使用できるというのは、親の喜びの一つである。²⁴⁾

言語学とか教育学といった専門的学識の見地を越えた、人間としての豊かな心情が一つの見解を作り出している観がある。

第三は、おばあさんの育児についての見解である。具体的には三ケースほど取り上げられている。その一は祖父母の孫への愛情の問題で、

おじいさんやおばあさんが孫にサービスしてくれることも私は同じ意味で賛成しない。これは、おじいさん、おばあさんのほうで、よほどよく考えてもらいたい。お守のサービス過剰に対して母親は、愛さないでほしいとは言い得ない。孫を愛するのはよろしい。しかし、子供とその親とを引き離すような結果になるのだったら、そ

21) 同上, p8.

22) 同上.

23) 同上.

24) 同上, p114.

れはその子の将来のために、考えなければならぬ。それをかえりみないというのは、であれば、そういうものは愛ではなしに、エゴイズムである。²⁵⁾

というもの。その二は育児法をめぐる見解(排尿のコントロール)の相違についてである。

夜間に再三親がおきて、ぬれても知らずにねている子のおむつをかえてやるのがいいのか、そのままにしておくのがいいか。どちらが子供の夜尿を早くなくさせるか。これはまだ十分に解決されていない。

おばあさんは必ずいう。嫁がずぼらで赤ん坊のおむつのぬれたのかを覚えてやらないから、赤ん坊はぬれたおむつの中でぬるのが平気になって、排泄を意識しないのだ、と。

若い母親は考える。出るとすぐかえてやっているのに、赤ん坊はいくら排泄しても不快な状態におかれることがない。そのために排泄に対してプレーキをかけることがなくなってしまうのではないか。²⁶⁾

両者の見解の相違について、十分解明されていないと断わったにもかかわらず、松田は若い母親の意見の方を支持する。ここにも科学的見地を越えて育児の当事者へエールを送る松田の独特なまなざしがあらわれている。その三は寝つきをめぐる育児法の見解の相違についてである。

夜ねむる前に満腹にさせるというのも、ねつかせる一つ的手段だが、これはあかねさんには効き目がなかったようだ。だが、おばあさんのなかには、夜ねる前にものを食べさせてはいけないという考えをもっていて、母親が赤ん坊に牛乳をのませるのを禁止している人もある。そういう場合

は、おばあさんの説得に成功すると、子供が早く寝つかれ、夜も再三おきずにすむこともある。²⁷⁾

以上、いずれもおばあさんの見解の方を否定的に捉えている。

第四は家庭の育児と集団の育児の関係についてである。

幼児の活動的なのはいいが、それが無限に許されるものでないことを教える規律も必要である。この規律が幼児に対して一定の重みをもち、かつ家庭の団欒を傷つけないというためには、家庭以外の力を借りなければならない。それは社会的な規律である。具体的にいえば、保育施設の中で自然に生じる規律である。²⁸⁾

おかあさんとだけでおくるお留守居の生活は、もうあかねさんには単調でありすぎる。来年は幼稚園に頼もう。そうすればお父さんは、屋外教育に今までほど時間をとられずにすむだろう。お母さんも家の仕事のために今よりも多くの時間をさけるだろう。²⁹⁾

ここに引用した二文は、子どもの発達過程で、ある年齢になればどうしても集団での教育が必要になることを根拠づけている。

まとめに代えて

松田の初期の育児書3点の考察を通して、氏の育児論の原点および変化の過程について、ある程度の輪郭を捉えることができた。以下の5点としてまとめてみる。第一は育児書の主テーマを小児医学の啓蒙から育児に悩む母親の助言もしくは赤ちゃんの人権

25) 同上, pp73 ~ 74.

26) 同上, p97.

27) 同上, p118.

28) 同上, pp169 ~ 170.

を守る役目へと移行させていったことである。たとえば、各育児書の最初のテーマをみると、『赤ん坊の科学』では“ 出産を断念すべき母おやの病気 ”として結核の病と出産についてが、『育児日記』では“ 双子の一人を里子にやるべきか ”として双子を母乳で育てるのは難しいのかが、『はじめての子供』では“ 男か女か ”の心配事がそれぞれ取り上げられている。またそれぞれが扱っている内容の範囲も、病気やけがから命を守る医学的知識から健康児の教育やしつけ、人権の相談を含む幅広いものに移っている。

第二に子ども観については、当初より個人差を踏まえた育児をうたっていた。しかしその内実は、体質の差異から性格の違いを含めた個性へ、さらに子どもの自立的な方向性をも包含する主体性へと視点の移動がみられる。第三におばあさんの育児については、一貫して批判的であった。その育児法、育児にかかわることを含めて若い両親に譲るべきことを繰り返し述べていた。第四にしつけや教育は、父母が意見を一致させ、協力し合い、“自分たちの流儀”あるいは“自分たちの生活の規律”という家庭運営の規範を確立することをもって行なうべきとしている。国や家風といった外から押しつけられたものでなく、夫婦二人が自立的につくり出すことの大切さが強調されている。市民という用語の登用にもその意味合いが込められている。第五に働く母親へのまなざしは当初より温かいものがあつた。自分自身、結婚当初は共働きであったことを語っている。その際働くことを望む母親に代わる育児の手としては、祖父母ではなく託児所が考えられていた。その集団施設の育児に果す意義について考察する過程の

なかで、効用や限界について先入観や差別観なく研究に取り組む姿勢が印象的であった。